

「否」は何を否定しているか

——「舞姫」の読解から——

内 田 守 紀

国語の授業は、現代文と古文とはその力点の置き方が違うにしても、基本的には、次の三つのレベルの読解を行っているはずである。(一)語、(二)文、(三)文章。(一)は単語の辞書的な意味と考えられているが、同じものをさす別の語があるのにその語を選んで表現したところに言語主体が隠されており、やはり、その場での語の「解釈」が必要である。(二)は文の論理的構造の解明である。古文の授業でよく行われているように、主語―述語の対応や修飾―被修飾の関係などを把握させる、所謂「文法」的解明は現代文に於ても行われるはずである。しかしここでも語と語との客観的關係だけではすまされない。例えば倒置表現で、述語―主語を主語―

述語に直しただけでは作者の意味づけ(価値づけ)が説明されない。これは強意の助詞としての係助詞と同じである。修辭法の解明も(二)に入る。文末の語も記述した事柄に対する作者の位置づけ(価値づけ)であるから特に重要であろう。(三)は文章の冒頭から始まるさまざまな展開をたどりながら主題を把握することであるが、展開はさまざまな屈折・転換や飛躍・転移を含んでいる。論

理的構成を持つ論文ならともかく、随筆、さらに小説となると、その作品の数だけ展開のパターンがあるわけだから、一つ一つの作品にそって考える以外に方法がない。しかし、ここにその作品の「意味」と「価値」があらわれるわけだから、この解明こそが文章の読解である。

一般に、文と文、段落と段落をつなぐものは、接続詞と代名詞であるが、感動詞も文脈の転換にかかわる機能を持っている。ここでは「舞姫」の一節から「否」という語をとりあげて、この語がいかに文と文を結びつけ、いかなる展開(転換)をしているか、という問題に限って、検討してみよう。

この間余はエリスを忘れざりき、否、^Aかれは日ごとに文を寄せしかばえ忘れざりき。余が立ちし日には、いつになく独りにて灯火に向かはんことの心憂さに、知る人のもとにて夜に入るまで物語し、疲るるを待ちて家に帰り、直ちに寝ねつ。次の朝目覚めしときは、なほ独りあとに残りしことを夢にやあらずや

と思ひぬ。起き出でしときの心細さ、かかる思ひをば、生計に苦しみて、今日の日の食なかりし折にもせざりき。これかれが第一の文のあらましなり。

またほど経ての文はすこぶる思ひ迫りて書きたるごとくなりき。文をば否といふ字にて起こしたり。否、君を思ふ心の深き底をば今ぞ知りぬ。君はふるさとに頼もしき族なしとのたまへば、この地に善き世渡りのたつきあらば、とどまりたまはぬことやはある。また我が愛もてつなぎ留めではやまじ。それもかなはで東に還りたまはんとらば、親とともに行かんはやすけれど、かほどに多き路用をいづくよりか得ん。いかなる業をなしてもこの地にとどまりて、君が世に出でたまはん日をこそ待ためと常に思ひしが、しばしの旅とて立ち出でたまひしよりこの二十日ばかり、別離の思ひは日にけに茂りゆくのみ。袂を分かつはただ一瞬の苦艱なりと思ひしは迷ひなりけり。我が身の常ならぬがやうやくにしるくなれる、それさへあるに、よしやいかなることありとも、我をばゆめな捨てたまひそ。母とはいたく争ひぬ。されど我が身の過ぎしころには似で思ひ定めたるを見て心折れぬ。我が東に行かん日には、ステッチンわたりの農家に、遠き縁者あるに、身を寄せんとぞ言ふなる。書き送りましたまひしごとく、大臣の君に重く用ゐられたまはば、我が路用の金はともかくもなりなん。今はひたすら君がベルリンに帰りましたまひし日を待つのみ。

ああ、余はこの文を見て初めて我が地位を明視し得たり。恥づかしきは我が鈍き心なり。余は我が身一つの進退につきても、

また我が身にかかはらぬ他人のことにつきても、決断ありと自ら心に誇りしが、この決断は順境にのみありて、逆境にはあらず。我と人との関係を照らさんとするときは、頼みし胸中の鏡は曇りたり。〔舞姫〕大修館「現代文」改訂版による。

右の文中の「否」と「否」はA B どのような内容を持った表現であるか検討してみよう。その手はじめに、何を否定しているか、からみてみよう。

Aの「否」は、前文「この間余はエリスを忘れざりき、」を否定している。限定して言えば「忘れざりき、」を否定している。「忘れなかった」を否定するのであるから、「否」の後には「忘れていた」という意味の文が来ることが予想される。しかし、次に来る文は「かれは日ごとに文を寄せしかばえ忘れざりき。」である。すると「否」は「忘れなかった」のではなく、「忘れることができなかった」と正確に言い直すために使われたことになる。そして、なぜ忘れることができなかったのかの説明として、「エリスが毎日手紙を書き送ってきたから」という条件がつけられている。もしこの条件がなければ「忘れることができた」はずである。つまりこの「否」は、内容的には「忘れざりき」を打消して、「忘れていた」ことを意味している。

引用の始めの「この間」とは、「舌人たる任務」をもって天方伯の一行に随って、帝政ロシアの首都ペテルブルグの宮廷に於て活躍している「間」のことであるが、余Ⅱ太田豊太郎は思わず「この間余はエリスを忘れざりき、」と並みの口をきいてしまっ

た。確かに結果的には忘れていないから。しかしそれは正確ではない。「否」と否定したのはいわば作者の鵬外であるとも言えうである。「草子地」といえるほどの落差はないが、「忘れざりき」と「かれは日ごと文を寄せしかば」という条件づきの「え忘れざりき」との間には決定的な違いがある。「余が立ちし日には、」から「……折にもせざりき」までのエリスの手紙が豊太郎の心の空白を埋めている。

次に、Bの「否」は何を否定し、どういう内実を表現しているか。

まず、教師用の指導書をみてみよう。大修館の「指導資料」では、

「文をば否といふ字にて起こしたり」『否』には、エリスの主人公との愛が終わってしまうのではないかとという不吉な予感に怯えながらも、それを打ち消そうという決意がうかがえる。エリスの思いせまった心情を伝える手紙である。」

と書かれている。これとはほぼ同じ解釈が「日本近代文学大系」（角川書店）の『森鷗外集Ⅰ』にあるので、これを受け継いでいるのかもしれない。

「否」といふ字にて起こしたりⅡエリスは孤独の日を過ごしながら愛する人の直感で、太田との愛の終わりが近づこうとしている運命の曲り角を予感している。そして不吉な予感に脅えながら、それを打消す『否』というはげしい言葉で手紙を書きはじめるのである。」

この二書に共通な「それを打（ち）消す」の「それ」は「不吉な予感」をさすから、この「否」は自分で自分の予感を打消す役割をするものと取っている。

筑摩書房の「現代文―学習指導の研究」では次のように説明している。

「否、君を思ふ心の……Ⅱ「否」は、ここでは、心中における自問・自答・感嘆を示すことばと考えられる。（作者鵬外の心の中では、無意識にせよ、ドイツ語の *Nein*——前記のような働きをする感動詞でもある——が響いていたのではなからうか。）エリスは、第一の手紙で豊太郎の不在を心細がっているが、こんどの手紙では「君を思ふ心の深き底をば今ぞ知りぬる。」と、自分の愛の強さ・深さを自覚したことを『否』（ああ、それどころではなく、）と強調している。」

この解説中の（それどころではなく）の「それ」は何をさすのか少しあいまいだが、「豊太郎の不在を心細がっている」どころではなく、という意味に取れば、第一の手紙の自分を否定しているようにも取れる。

この表現を単純に形式論理で考えてみると、この文は「……Ⅱ、否、君を思ふ心の深き底をば今ぞ知りぬる。」の……の部分、いわば〈零文〉となつて省略されていると考えられるわけだから、「否」は「……」の部分で否定していることになる。「非A、否、A」の「非A」の部分〈零文〉である。すると、Aを否定する文を考えればよいわけである。「あなたを愛する自分の心の深さを今こそ知った。」を打ち消せば、「あなたを愛

する自分の心の深さを今まででは知らなかった。」となる。

では、この〈零文〉を加えて、この二つの文を「否」でつなげてみよう。

「あなたが愛する自分の心の深さを今まででは知らなかった」、否、あなたが愛する自分の心の深さを今こそ知った。」

これはおかしい。同義反復である。「否」で接続できない。つなぐとすれば「然り」である。「否」でつなぐためには、「あなたが愛する自分の心の深さを今まで知っているつもりでいた。いやそうではなかった。知らなかった。(今初めて知ったのである。)」とならなければならない。これならばこの形式論理は「A、否、非A」という型である。

筑摩の指導書にあるように、鵬外はドイツ語の *„Nein“* を頭

に浮かべていたとすれば——これは大いにありうることである

——「否」の次に来る文は「否定文」でなければならない。「否」の次にくる文は「今ぞ知りぬる。」ではなくて、「今までは知らなかった」という意味のドイツ語が鵬外の頭の中にあつたはずである。しかし鵬外は日本語で書いている。その否定文を「今ぞ知りぬる」という肯定文の日本語に翻訳したのだと考えることもできる。しかしまだ問題は残る。われわれ読者は——あることは太田豊太郎自身も——エリスは以前から豊太郎を愛しているものとして読んできているから。われわれはエリスの愛の「底」をのぞいてみる必要がある。

ところで、時枝誠記は『日本文法 文語篇』（岩波全書）の第四章文章論の六、「感動詞の文章における意義」の中で次のよう

に分析している。

(1)、あゝ、悲しいかな。

の「あゝ」のような感動詞は、「後続の文と同格であり、後続の文は、感動の内容を、分析して叙述したものである。」とし、さらに、

(2)、(1)のように感動の直接的表現に属するものの外に、呼びかけ、応答に属するものがある、として、「いで(や)」を例に挙げている。源氏が女三宮のもとで、柏木の手紙を発見した時の、宮の女房小侍従の気持、

「いで、さりともしそれにはあらじ。いといみじくすることはありなむや」と思ひなす (若菜下)

を例にとり、『いで』は、それに先行するところの、小侍従の気持ち、即ち、『あの手紙は正しく柏木のものに違ひない』といふ驚きの気持ちを打消すところの感動詞である。換言すれば、小侍従自身の思考過程を反転させる役目を持つてゐるのである。このやうな『いで』の分析叙述されたものが『さりともしそれにはあらじ云々』といふ後続の文となるのである。」と述べている。

さらに続けて、

(2)、いで、われを人ながめそ、大船のゆたのたゆたに物思ふころぞ (古今集恋一)

の「いで」は、「この歌に先行するものとして、作者に対するその周囲の人々の批難の言葉を前提とするものであつて、それらに対する作者の反撥の感情が『いで』として表現されたものと解」している。

時枝誠記は、「いで」について、さらに、

(3)、文脈を反転させることは反対に、相手を勧誘し、自分の気持ちを進展させる場合があるとして、

「この世にのゝしり給ふ光源氏、かゝるついでに見奉り給はむや。世を捨てたる法師の心地にも、いみじう世のうれへわすれ、齢のぶる人の御有様なり。いで、御消息聞えむ」(若紫)

をあげて、この「いで」は「我が身を促す気持ちの表現である」としている。

一般に何かを打ち消すということは、それによって自分を肯定し、自分を打ち出すことであるから、(1)から(2)、(2)から(3)へと進むことは自然の理である。「いやあ、驚いた!」の「いやあ」は感動詞であろうが、その感動を分析したものが「驚いた」であり(1)、それは、それに先行する相手の平静な気持ちを「打消し」て(2)、さらに自分の驚きの気持ちを強く打ち出している(3)、と考えられる。

この「いで」に関する時枝誠記の分析は、「否」を考える上にもそのまま適応できる、と思われる。そこで、本文の展開にそって考えてみよう。

まず、Bの「否」で始まる手紙は豊太郎宛のものだから、豊太郎に向かって豊太郎の考えを予想し、それを否定したものとなることができる。

「豊太郎さん、あなたは、私があなたをずっと愛していたと思っていられっしやるでしょう。(私自身もそう思っていたから。)しかし、違うのです。あなたへの愛がどんなに深いか今まで知りま

せんでした。」

もう一つは、先行した「第一の手紙」を否定しているともとれる。第一の手紙は、「袂を分かつ」「一瞬の苦艱」を述べたものであるから。つまりこれも今までの愛情の浅さを否定したものといえる。

次に、時枝誠記の論(1)にあるように、「否」の内容の分析はすぐ次の文がそれであるが、さらにそれ以後の文章の展開はその分析をより深めたものである。ここで一読しただけでは読み過ぎしてしまふポイントがある。それは④「と常に思ひしが」は何を受けているか、ということである。すぐ前の「……待ため」だけだろうか。そうではない。「君はふるさとに頼もしき族なしとのたまへば……」から「君が世に出でたまはん日をこそ待ため」まで、である。この間の文はすべて現在形で書かれている。「……ことやはある。」「……やまし。」「……いづくよりか得ん。」「……待ため」これらはすべて「と常に思ひしが」を受けていて過去のことである。それを全て否定しているのだ。もう一つは、「袂を分かつはただ一瞬の苦艱なりと思ひし」ことも過去のことであり、これも「迷ひなりけり」と否定されている。この「迷ひなりけり」は前の③「と常に思ひし」ことも「思い違い」であったと否定していると考えられる。

以上が冒頭の「否」の内容であると考えられる。つまり、母と一緒に日本に行く路用の金もないから、この地にとどまって豊太郎の出世を待つという愛情の質(浅さ)であったものを否定し、今は自分一人が日本へ行くと変っている。母を捨てたといつてよ

い。これが「今ぞ知りぬる」「君を思ふ心の深き底」である。この愛情の質の変化は決定的である。「否」と大きく否定するだけの違い（転換）を持っている。そしてこれは「相手を勧誘し、自分の気持ちを進展させる」機能を持った「否」でもある。昔のことばで言えば、ここで初めてエリスは「自分の実存を賭けた」のだ。だから、豊太郎は「この文を見て初めて我が地位を明視し得た」のだ。

この事は、今までこの作品はすべて余（豊太郎）の視点から書かれていたのが、ここで、手紙とは言え、エリスの視点に転換している事と関連している。ここまでの描写の中で唯一エリスの内面を垣間見させる描写は、エリスが豊太郎を相沢に会いに行かせる場面で、

「これにて見苦しとはたれも言はず。我が鏡に向きて見たまへ。なにゆゑにかく不興なる面持ちを見せたまふか。我ももろともに行かまほしきを。」少し容を改めて、「否、かく衣を改めたまふを見れば、なにとなく我が豊太郎の君とは見えぬ。」また少し考へて、「よしや富貴になりたまふ日はありとも、我をば見捨てたまはず。我が病は母のたまふごとくならずとも。」という所だけである。正装して「なにとなく我が豊太郎の君とは見えぬ」ないことが、エリスの不安を引き出し、「少し容を改めて」と「また少し考へて」の分だけ、エリスの内面が露出している。これ以外はすべて「我が身一つ」の視点から描かれている。しかし、このエリスの手紙は、「第一の文」では「余が立ちし日には……」と始まるように初めは「余」の視点に立ちながら、「……

夢にやあらずやと思ひぬ。」あたりからエリスに主体が移動してしまっている。それが「ほど経ての文」になると完全にエリスの手紙の「直接話法」となり、エリスの主体が前面に出ている。エリスが主体で豊太郎が客体である。ここで初めて二つの主体が対峙した、関係が成立したといえる。「我が身一つ」の「われ」でも「我が身にかかはらぬ他人」の「かれ」でもなく、「我と人との関係」が成立した。

しかしその時「胸中の鏡」が曇ってしまうのは何故か。今まで豊太郎が主体（男）で、エリスは客体（女）であった。しかし、相沢謙吉がドイツに現われて以来、相沢―豊太郎、エリス―豊太郎という一種の三角関係が成立したとみることが出来る。ここでは豊太郎は「女」である。豊太郎の心性の「本性」はすでに、

「我が心はかの合歓といふ木の葉に似て、物触れば縮みて避けん」とす。我が心は処女に似たり。」

「船の横浜を離るるまでは、あつぱれ豪傑と思ひし身も、せきあへぬ涙に手巾を濡らしつるを我ながら怪しと思ひしが、これぞなかなか我が本性なりける。その心は生れながらにやありけん、また早く父を失ひて母の手に育てられしによりてや生じけん。」

と書かれている。これらの描写は、ただ豊太郎がウブであったという以上に豊太郎の心性をはっきりとつかんだものとみることが出来る。一方相沢謙吉の「快活の気象」が極めて男性的であることは偶然ではない。豊太郎がこの間にあって「胸中の鏡」が曇るのは当然といわなければならない。この三角関係は、単に男女の

性の問題ではなく、おそらく日本対ヨーロッパという二つの世界の関係として鵬外のかかえていた問題を象徴していると思われるが、ここでは手に余る問題である。ともあれ、この小説は、

「ああ、相沢謙吉がごとき良友は世にまた得がたかるべし。されど我が脳裏に一点の彼を憎む心今日までも残りけり。」

と結ばれているが、この豊太郎の言い訳とも責任転嫁ともとれる結びは、それ以上の意味を持っているといえる。

注 「うたかたの記」(上)に次のような例がある。

……物語畢りしとき、少女は暫し巨勢を見やりて、「君はその後、再び花うりを見たまはざりしか、」と問ひぬ。巨勢は直ちに答ふべき言葉を得ざるやうなりしが、「否。花賣を見し其夕の汽車にてドレスデンを立ちぬ……。」

「君はその後、再び花うりを見なかつたか」という問いに対して、「いや。花賣を見たその夕の汽車でドレスデンに立ってしまった(から)。」の「いや。」は「見なかった」の意味である。これは日本文では、問いが「見なかったか」という否定文であれば、「然り。」となる所である。鵬外はドイツ語の文脈で考えていたはずである。

(京北高等学校)